

# 水俣学通信

第 29 号  
2012.8.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies



2010年 水俣市袋茂道の恵比寿様の前で学生に説明する原田先生（写真 水俣学研究センター）

## 原田正純追悼号

### 目 次

原田先生お別れ会： 「弔辞」…………… 2 宮本憲一	「原田先生ソウル追悼式」…………… 8
「原田正純先生へ」…………… 4 石牟礼道子	「故 原田正純先生追悼の辞」…………… 8
「追悼 原田正純先生」…………… 5 宮澤信雄	「各紙の紙面から」…………… 9
「原田正純先生「お別れ会」」…………… 6 高峰 武	「原田正純先生と水俣学の創世記」…10 花田昌宣
	調査報告： 「カナダと連帯する意味」……………11 井上ゆかり
	水俣学研究センター日録……………12

《原田先生お別れ会》

弔 辞

大阪市立大学名誉教授、日本環境会議名誉理事長 宮本 憲一



原田さん、あなたの今から17年前の自叙伝、「この道は」の最後に、命ある限り、貧しきもの、被害者の立場に立って差別をなくす道を行こうと述べています。この決意の通りあなたは病床にあっても患者と会い、水俣病解決のための仕事を死の直前まで続け、大往生を遂げました。原田さんの医学者としての仕事は水俣病像、胎児性水俣病の発見を始め、3,000人の脳波を調べた炭塵爆発の一酸化炭素中毒症、カネミのダイオキシン災害、さらに土呂久のヒ素中毒などこれまで手がつけられなかった重大な疾患の解明に大きな業績をあげました。しかし原田さんの仕事は医学・医療の分野にとどまりませんでした。すでに原因が解明されていた水俣病が新潟で再び発生したことを見て、研究の結果が単に学術発表に終わって社会的、政治的活動をしなかったために、科学者の社会的責任を果たせなかったということを痛感されまして、それ以後現場に密着されまして患者の発掘と救済に全力をつくしました。原田さんが水俣病裁判や救済の市民運動に参加して発言をし、数十冊におよぶ著作を出さなければ、この世

界最初で最大の産業公害である水俣病も、権力の手で隠されてしまったかもしれません。

私は1963年、都留重人さんを委員長とする公害研究委員会を作りまして、翌年、水俣病をチツソの有機水銀中毒症であると指摘をした「恐るべき公害」を出版したのですが、水俣を訪れたのは水俣病対策市民会議の日吉フミ子さんに呼ばれた1968年のことでありました。原田さんと仕事をするようになったのは、それから7年後の1975年のことでありました。公害研究委員会は世界環境調査を企画いたしまして、宇井純さんの推薦で、原田さんは委員会の一員として一緒に世界をまわることになりました。原田さんにとっては、この最初の国際調査と学際的な研究グループに入ったということが大きな転機になったのではないかと思います。

この調査の中でも、雪と氷の中を氷上飛行機で往復したカナダ原住民の水俣病調査がもっとも大きな成果でした。オーロラの舞う夜に、原田さんと語り合ったことが忘れられません。カナダの水俣病患者の姿は、日本の水俣病患者と同じ、いやそれ以上に社会的差別を受けていました。カナダ政府は日本政府の判断基準を基にして「カナダには水俣病はない」と言っていたのです。原因社である、多国籍企業のパルプ工場を擁護しまして、先住民の生業を奪っていました。私たちは日本の政府の水俣病対策を改めて、正しい病像論を確立しなければカナダの患者も救われぬ、水俣と同じように社会的差別をなくして、地域の制度を再生しなければ問題は解決しないと結論したのです。



原田先生に語りかける宮本憲一先生 (写真 水俣学研究センター)

日本の教訓を伝え、どのようにして水俣病などの公害を防ぐのか。そのことの自覚がこれ以後の原田さんのめざましい国際的活動を生み出すことになりました。原田さんのモットーは先ほど石牟礼さんがお話になったように、患者に学ぶということでした。あなたは病気を診るのではなく、患者の人間、患者の人格を見る医者でした。このことが患者にとって全面的な信頼をあなたに寄せることになったのでありましょう。

原田さんは4つの大病を患いながら、私たち公害研究委員会の仲間といってもいい奥様、寿美子さんの献身的な介護を受けて、不死鳥のように仕事を続けました。この3月の日本環境会議にも出席して、原発災害を水俣病の教訓から告発する重要な発言をしてくれました。

原田さんは日常の私たちの付き合いでは、深刻な問題や自分の病気をも、おもしろおかしく冗談にしてみせるサービス精神のある話術の名人でありました。女性のファンが多いのは、このユーモラスなさわやかな人柄だったのだと思います。今、原発災害、沖縄の基地公害、アスベスト災害など水俣病の失敗と同じ災害が繰り返されています。原田さんの最後の偉大な仕事は水俣学の提唱でありました。それはこのような水俣病の教訓に学ばず、国内外で繰り返される社会的差別をなくすような社会を建設する科学を作りたいという志があります。

どうぞ熊本学園を始め、地元の皆さんはこの原田さんの遺志を継いで水俣学を維持発展させていただきたいと思っています。

最後になりましたが、私個人としては家族ぐるみで40年間、最も気の許せる親友であったあなたを失った悲しみはつきません。しかし、おそらく演劇人であったあなたのことですから、このお別れの会の有様を演出観点で見ているにちがひありません。そして、きっとこれを「涙の別れ」にするな、未来に向かっての「ほほえみ」の中で別れを告げてほしいとつぶやいているのではないかと思います。

友よ、ほほえみの花園の中で眠ってください。楽しい交流をしてくれてありがとうございました。ここにいる皆さん方がおそらくあなたの志を受け継がれていくと思います。

さようなら。

宮本憲一。2012年6月14日。

さようなら。



カナダ水俣病調査の打ち合わせ（第二次調査団）1975年8月  
宮本、原田、中西、赤木（写真 原田正純）

## 《原田先生お別れ会》

## 原田正純先生へ

作家 石牟礼 道子

もうおつきあいをしはじめてから50年をこしたと思います。今日見えていらっしゃるけれども、金子さんのお母様。

いつも先生にお会いすると、医師は患者に学ばないといけないとおっしゃっていました。

患者さんにいつもほくは教えていただいております、そのようにおっしゃっていました。

今もありありと思ひ浮かべるのですけども、先生がまだ寿美子さんにご結婚なさる前だったと思いますけれど、集団検診で熊大の先生方が、まだ原因がはっきりわからなかった頃に、度々に集団検診のようなことが、奇病が多発していた村々の公民館に村の人たちがあつめられて、白衣を着た先生方が何人もいらして、調べておられましたけど、おひとり変わった先生がいらっしゃる、原田先生でしたのですが、子供たちが、いまここにみえていらっしゃる胎児性の人たちもいたかと思うんですけども、検診の最中に原田先生になつて、子供さんたちは、ネコの子が甘えて人間のそばへやってくるような雰囲気、子供たちが原田先生にとりすがって、甘えて、顔を見上げていたりし

て、そういう子どもたちと原田先生は戯れていらっしやいました。まだ原田先生というお名前は存じあげませんでした。

それで、原田先生がお見えになると、そこは、原始の野原に解き放たれたような、のびのびとした温かい広々とした気持ちにみんななるらしく、それからの長い年月、魂のやすらぎがあった日のことを覚えていることでしょう。

私など原田先生とお目にかかる、そのような、たいへん人間が生物として持っているのびやかな気持ちにならせていただいて、励まされて、「苦海浄土」という本を長いあいだかかって書きましたけども、原田先生がいらっしゃる、いらっしやらなかった世界は考えられません。

人はいかに生きるかというお手本を、いつもニコニコして、なにげないお言葉でおっしゃっていて、ご自分の存在をもって教えていただいたと思います。

あまり長く申し上げてもほかの人に迷惑がかかりますから、ここに詩を書きましたが、これを読みまして終わらせていただきます。

## 花を奉る

石牟礼 道子

薫風かきざ萌すといえども われら人類の劫塵こつじんいまや累かさなりて  
 三界さんがいいわん方なく昏くらしまなこを沈めてわずかに日々を忍しのぶに なに  
 に誘いざなわれるるにや  
 虚空こくうはるかに一連の花  
 まさに咲ひらかんとするを聴く  
 ひとひらの花弁 彼方に身みじろぐを まぼろしの如ごとくに視みれば  
 常世とこよなる仄明ぼろあかりを 花その懐ふところに抱けり  
 常世の仄明ぼろあかりとは あかつきの野の原にゆるる蕃つぼみのごとくして  
 世々の悲願ひがねをあらわせり  
 かの一輪ひとりんを拝受はいじゆして 寄る辺よりのへなき今日の魂こゝろに奉らんとす  
 花や何 ひとそれぞれの涙のしづくに洗すすわれて 咲さきいずるなり  
 花やまた何  
 亡なき人を憫あはぶすがを探たずさんとするに 声こゑに出いせぬ胸底むねの想おもいあり  
 そをとりにて花となし み灯あかりりにせんとや願ねがう  
 灯あかりらんとして 消きゆる言ことの葉といえども  
 いずれ冥途みやうとの風かぜの中なかにて  
 おのおのひとりゆくときの 花あかりなるを  
 この世を 有縁うゑんといひ無縁むゑんともいふ その境界くわいがいにありて  
 ただ夢のごとくなるも花  
 かえりみれば まなうらにあるものたちの御形おんかたち  
 かりそめの姿なれどもおろそかならず  
 ゆえにわれらこの空しきを礼拝らいはいす 然しかして空しとは云いわず  
 現世げんぜは いよいよ地獄じごくとやいわん 虚無こゝろとやいわん  
 ただ滅亡めつぼうの世せまるを待つのみか  
 ここにおいて われらなお地上ちじやうにひらく  
 一輪の花の力を念ねんじて合掌がっしょうす

## 《原田先生お別れ会》

## 追悼 原田正純先生

水俣学研究センター客員研究員 宮澤信雄



原田先生と宮澤さん（写真提供 宮澤信雄氏）

水俣病一次訴訟提訴から3カ月、裁判に勝つための水俣病研究会を作ることになった。1969年9月5日、「水俣病を告発する会」の渡辺京二さんと私は医学部に原田先生を訪ね、研究会への参加を頼んだ。先生は快く引き受けてくださった。渡辺京二さんが原田先生をと考えたのは、その3カ月前に出た『告発』創刊号に、先生が次のように書いたからだだろう。

「現在、われわれが水俣病（有機水銀中毒）患者として  
いるものは、水俣病と認定されたものであって、有機  
水銀中毒そのものではないということをはっきりして  
おく必要がある。〈中略〉今われわれは医学的にも、社  
会的にもその有機水銀中毒の全貌を明らかにする必要  
があることを痛感する…」

先生はあちこちで、水俣病研究会で水俣病を定義し  
ろと言われて、改めて水俣病について考えさせられた  
と書いたり話したりしていらした。しかし、これを読  
むと、先生は水俣病問題の本質を最初から見抜いてお  
り、2004年の最高裁判決さえ先取りしていたと言え  
るように思う。

70年夏、『企業の責任』ができあがると、次は行政の  
責任としての未認定患者問題に取り組むことになった。  
川本輝夫さんたちの行政不服審査請求も始まっていた。  
71年1月、先生と私は新潟に行き、熊本と新潟の病像  
の違いは、症状の拾い方の違いにすぎないと確かめる  
ことができた。自分の診断が間違っていない自信を得  
た先生は、申請を棄却された患者とその周辺の人達を  
診察することで被害実態を確かめ、被害のとらえ方は  
どうあるべきかをまとめ上げた。それが環境庁裁決と  
次官通知「認定の要件」に結実した。

1977年7月1日、52年判断条件が公表されると先生  
は、私の日記によると、「これまで言われてきた教科  
書的なもので、これで認定が促進されるとは思わない。  
水俣病そのものをどう捉えるかという根本に立ちかえ  
らねば」とコメントした。その実践の成果にほかなら  
ない二次訴訟での鑑定と証言が、その後の未認定患者  
の裁判の行方を決定づけたと言ってよい。

1985年8月の福岡高裁判決で確定した「曝露歴+四  
肢末端優位の感覚障害」は、その後司法では、最高裁  
判決に至るまで定着したと言える。追いつめられた行  
政は苦し紛れに「司法判断と行政判断は違う」と強弁

し、「高度な学識と豊富な経験」を持つはずの「医学  
者」らは「素人の裁判官に何がわかるか」と遠吠えす  
るしかなかった。先生は、時に苦笑しつつ、時に怒り  
つつ「裁判では全戦全勝でしょう、52年判断条件につ  
いてはとっくに決着はついているのよ」と語っていた。

何度か聞いた先生の述懐がある。水俣病の症状は本  
当に非特異的なのかという話の時だった。「でもね、  
水俣病の感覚障害は不思議なんだよねえ。日によって  
症状が変動するし、腱反射が消えないんだよねえ」。  
水俣病の感覚障害が末梢神経障害・多発神経炎だとい  
う通説からするとあり得ないことで、審査会の医師達  
は、それを理由に多くの患者を棄却していた。患者は  
ウソなんか言いませんよと言う先生は「それが水俣病  
の感覚障害なんだよねえ」と認めていた。それは事実  
上、水俣病の感覚障害が中枢性のものであり、ほとん  
ど特異的なものであると認めたに等しかったと私は思  
う。のちに、メチル水銀が傷害するのは末梢神経では  
なく大脳皮質の感覚領野であることが明らかになった  
とき、私は「先生は臨床的には誤ちをおかしていな  
かったと、誰はばからず証言します」と手紙に書いた。  
亡くなる1カ月前、改めてそのことを申し上げると、  
本当に嬉しそうだった。

先生がいなかったら水俣病はどうなっていたら  
かと思ってみる。胎児性患者は最初に亡くなった2人  
だけだったかも知れず、不知火海周辺の被害者は「失  
(う)してられた」ままだったかもしれない。天は水俣  
病のために先生を遣わしなさったと思えるのだ。

それにつけても思うのは、先生も指摘していた特措  
法の欺瞞性だ。先生は常々、メチル水銀を取り込んだ  
全住民をカバーする救済・補償が必要だと言っていた。  
法の衣を被せた第二政治解決、しかもチツソ救済法に  
ほかならないものを求めたのではない。権力は、パン  
の代わりに石を、魚の代わりに蛇を与えたのである（新  
約聖書）。権力にすり寄らず、被害者に寄り添い続けた  
先生の無念さと怒りをわがものとすると呼ぶしかない。

ああ、原田正純先生、いま銀河鉄道のどの辺りを走  
っておいでですか。カンパネラを見失ったジョバン  
ニみたいな気持で日を送っているのです。

## 《原田先生お別れ会》

## 原田正純先生「お別れ会」

熊本日日新聞社論説委員長 高峰 武  
(水俣学研究センター客員研究員)



原田正純先生「お別れ会」は亡くなられて3日後の6月14日正午から、自宅近くの玉泉院月出会館に約1,300人が参列して行われた。



お別れ会の様子

## 「楽しい会に」

司会の熊本学園大学水俣学研究センター長・花田昌宣教授によれば、「みんなでわいわい話すような楽しい会にしたい」という原田先生の生前の意向で、宗教色のない自由葬となったという。1、2階席とも埋まり、立ったままの人も多い。遺影の笑顔が会場を和ませる。供花の列。生前の活動を紹介する写真。ある人は、写真に自分の歩みを重ね、ある人は自分の知らない原田先生を見いだす、という具合だ。アマリア・ロドリゲスが歌うファド「暗いはしけ」が流れる。ファドは郷愁と情念がないまぜになったようなポルトガルの歌。1954年公開のフランス映画「過去を持つ愛情」の主題歌で、先生の青春の思い出の一つという。

あいさつに立った寿美子夫人。6月3日に結婚45周年のお祝いをされたばかり。涙声だが、しかし、メッセージは真っすぐに伝わった。

「2006年に脳梗塞、その後食道がん、白血病と発病しましたが、最後まで仕事をして、原田らしかったと思います。多くの本を残し、たくさんの賞をいただきましたが、患者さんのことを思い続け、差別をしないことに一貫した信念をもち、現場主義を最後の最後まで貫き通しました。病気になるまで、世界中、日本中を回って家にいることは少なく、原田がどういうことをしているか知らなかったんですが、病気をしてから

講演などに一緒に行き、ああ原田はこんなことをしていたんだ、もう遅いんですが、ああ、原田はすごいなと思いました。熊大を辞めた時に、油絵をしたかったんでしょう、一式そろえました。学園大に移ってから絵を描きたいと言っていたんですが、忙しく、私が、早くしないと絵の具が腐っちゃうよと言っていたんですが、後で家に先生に来てもらって、1カ月1回、本当に楽しんでいました。最期は自宅だという本人の希望で、治療もしない、延命治療もせずということで、娘2人、孫、それにたった1人の弟が鹿児島から駆け付けてくれ、弟が着いて安心したのか、苦しみもせず、77歳の生涯を終えました。酒が好きで、私が注意すると、俺が酒を飲めない時は死ぬ時だと言っていました。ほんとに最後は飲めませんでした。

もう一度、水俣に行きたい、もう一度、(勤めていた)病院に行きたいと言っていました。かありませんでした。原田と結婚したことで多くのことを学びました。大好きな夫でした。病気したことで、一緒にいる時間ができて、今まで一緒にいなかった時間を今、取り戻しているねって。病院から帰ったら、『母ちゃんが家に戻してくれた、ありがとう』と言って、庭を眺めながら、何の薬よりいいと言って、アマリア・ロドリゲスを聞いていました。原田は幸せだったと思います。本当にありがとうございます」

「原田正純医師 最後の水俣病検診 2011年8月」のビデオ上映もあった。「水俣病は一つしかないのに、行政の方が(いくつもの水俣病に)分断するんですよね」。スクリーンの原田さんはいつもの「原田節」である。

## 「4銃士」

続いて、車いす姿で作家・石牟礼道子さんが語る。ゆっくりだが、原田先生の人柄がしのばれる内容だった。(挨拶全文と詩は、4pに掲載。)

石牟礼さんは最後に先生への手向けの詩、「花を奉る」を読み上げた。

昭和30年代中ごろから後半以降にかけて、患者たちが息を潜めるようにしていた時期。4人の若者が水俣を歩いていた。思いは違ったのだが、「核」にあったのは水俣病事件と患者の存在だった。医者の方原田正純、



原田先生のお別れ会で、言葉を述べる作家の石牟礼道子さん

主婦の石牟礼道子、化学者の宇井純、写真家の桑原史成の4氏。4人はそれぞれ、自分の知らない人物が水俣病を調べていることを話に聞いてはいたが、お互いをきちんと認識するようになるのは後になってからだ。「水俣の4銃士」とでも呼ぶべき4人の初期

の行動がその後、水俣病を広く、深く伝えていく。

事件は人を生む。

### 「それぞれの原田さん」

「お別れ会」ではいろいろな人と交友を重ねた原田さんらしい姿が浮かんだ。

熊本県精神科病院協会会長で、原田さんが最後まで勤務したくまもと青明病院長の宮川洸平さんは「どんな人にも対等で同じ目線で接した。最期は仏像のような安らかな顔でした」と語り、学者仲間として二人三脚の歩みをした日本環境会議名誉理事長の宮本憲一さんは水俣病、一酸化炭素中毒、カネミ油症、土呂久のヒ素中毒などの研究に触れ、「原田さんの行動がなければ、世界最初で最大の環境災害である水俣病は権力の手で隠されていたかもしれない」と指摘した。

胎児性患者は原田さんが最後まで気にかけていたこと。原田さんと1972年に、第1回国連人間環境会議が開かれたスウェーデン・ストックホルムで世界に水俣病を訴えた坂本しのぶさんは、「これからだれに相談したらいいのか」と万感の思いを語った。「今日、6月14日は水俣病第一次訴訟を提訴した日(1969年)です」と話し始めたのは、水俣病一次訴訟原告で、胎児性患者の上村智子さんの父親・好男さん。好男さん夫婦は智子さんを「宝子」と呼んだ。「天国で智子も先生に声をかけてもらい、笑っていることでしょう。見えない目で娘も先生を懸命に見ていることと思います」

「訃報を聞いて、一睡もできなかった」と言うのは元熊本県知事の潮谷義子さん。知事として胎児性患者の家に行く時、原田先生が「僕が先に行っているから安心して行きなさいと言ってくれた」と振り返った。原田先生を熊本学園大学に招き、「水俣学」がスタートした時の学長だった坂本正教授は「水俣学は、熊本に

ある大学としての社会的責任でした。問題と真摯に向き合い、訂正することを恐れない謙虚さこそが水俣学を根底から支える基本思想でした」。水俣学研究センターの田尻雅美助手は「名前を覚えてもらうのに2年ぐらいかかった」とエピソードを紹介した後、「原田先生がやりたかったことを継承したいと思います」と決意を披露。早稲田大学の淡路剛久教授は「花園に入って行かれて残念だが、私たちが引き継いでいきます」と語った。最後は、「私は原田先生に会うまで医者が嫌いだった」と語ったカネミ油症五島市の会事務局長の宿輪敏子さん。

さまざまな現場に足を運んだ原田さんの軌跡が、それぞれの発言にあった。

海外も含め600を超える弔電が披露され、親族を代表して弟で医師の原田隆二さんが立った。太平洋戦争末期の昭和20年7月の熊本大空襲で家を焼かれ母を亡くし、焼け出された兄弟。原田さんは父の実家の鹿児島、隆二さんは親戚のいる東京と別々に育ったが、進路を相談した時、兄である原田先生は「自分のやりたいようにすればいいじゃないか。しかし弱い立場の人がいることを決して忘れるな」とアドバイスしたという。原田先生らしい助言だった。

1,300人が手向ける赤いバラの献花が途切れない。「暮らしや社会に入り込み何をすべきかを探った医師。本当のヒューマニストだった」。参列したノンフィクション作家の柳田邦男さんの言葉だ。交わされる「お久しぶり」の言葉。「お別れ会」は、いろいろな人たちの再会の交差点ともなった。午後2時終了予定は30分遅れ。それぞれの思いが連なったこの日、熊本は汗ばむ陽気となった。水俣病と正面から向き合い、事件の本質を看破した原田さんに「ありがとう」の言葉が送られた。

(写真はいずれも、熊本日日新聞社提供)



大勢の参列者が訪れた原田先生のお別れ会

## 《原田先生お別れ会》

# 原田先生ソウル追悼式

6月14日、熊本で原田先生へのお別れの式が持たれた同日、ソウルでも環境財団のホールで追悼式が執り行われ、原田先生のご冥福を祈り、30人余りが集まった。

式では、わたしが原田先生の略歴を紹介させていただいた。「全国労働安全衛生センター連絡会議」議長として、日韓の民間における労働安全衛生の交流に道を開き、その流れはアスベスト対策運動として今日、アジアでのノン・アス運動に引き継がれていることを紹介した。

また、原田先生に縁のある方が、追悼の言葉を述べた。

「日本社会の主流と最後まで妥協せず被害者と共に自らの道を行かれた方です。わたしが4歳年上だが、長

韓国労働健康連帯 会員 鈴木 明

年の友だちだ。我々とはとても大切な環境専門家を失った」パク・ヒョンソ（源進職業病管理財団理事長）

「民主化運動で監獄にいた時、水俣病の本を読み衝撃を受けた。その後、温山（オンサン）病問題で直接お会いし、20年以上環境運動家として交流してきた」

チェ・ヨル（環境財団代表）

「学問とは自ら直接確認し、悟り、自ら作っていくものだ、とおっしゃった言葉が記憶に残っています。大変、温厚な印象の方です」パク・ドミョン（ソウル大学保健大学院教授）

追悼会場には、1986年10月にオンサン病患者を診る原田先生の写真と遺影が置かれ、韓国の若い環境運動家を含め全員で献花が行われた。

## 故 原田正純先生追悼の辞

中国・清華大学水俣病調査団団長 王 名

本日は、原田正純先生の告別式が執り行われるにあたり、清華大学水俣病調査団を代表いたしまして、遠方より謹んで弔辞を捧げ、深く哀悼の意を表します。生者必滅は世の定めとは申せ、先生の突然の訃報に接し私どもは、ただぼう然とするばかりでございます。いま、ご家族をはじめご親戚の皆様の中をお察し申し上げますとき、誠に痛恨の極みでございます。

原田先生の畏敬すべきご一生は、医師として公害の原点と言われる「水俣病」と向き合い、患者への愛と保護、そして社会への正義と誠実を貫いたご一生であったと存じております。私どもは、先生から直接の指導を受けるとともに、先生の数多くの著作を拝読して、その一部を中国語に翻訳させていただきまして、大変勉強になりました。昨年の11月、私ども調査団一同は、水俣を訪問する際、先生は病身にもかかわらず、手厚くもてなしてくださり、講義もしていただきまし

た。中国での水俣病のことも心配され、「今年ぜひ清華大学を訪問したい」とおっしゃってくださいました。最近、先生が入院されておられることを耳にしました。いつか、先生とのお別れの日が来るであろうことは覚悟しておりましたが、いざその日を迎えますと、やはり信じられず、悲しみが胸にこみ上げて参ります。

水俣病との闘いも、患者さんの救援も、まだ終わっておりません。急成長の中国では、新たな水俣病も発生しつつあります。このような公害問題と戦い続けることこそが、水俣病研究の第一人者である原田先生へのご恩に報いることだと思われま

す。本日の告別式に際し、在りし日の先生の面影を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げ、お別れの言葉といたします。

原田先生、やすらかに休みください。ありがとうございました。

## 《原田先生お別れ会》

## 各紙の紙面から

「原田先生、ありがとう」「まだ長生きしてほしかった」一。原田正純さんの死去から一夜明けた12日、その活動と人柄を慕った水俣病患者や支援者らに深い悲しみが広がった。[6/12 熊日]

不幸にもこの半世紀、原田さんを必要とする人や土地が地球上から絶えることはなかった…中略…「原田正純」という道しるべを失った悲しみは深く、大きい。[6/13 熊日]

今あらためて水俣病から何を学ぶべきかを自らに問い掛ける姿勢が、私たちに求められている。

[6/13 熊日]

折れない葦のような人だった…中略…貫いていたのは、権力におもねらない精神の自由さ、だった…中略…最後の訪問となった日。話を終え辞去しようとする、[いい人と巡り会えた人生だった]と笑われた。「いえ、いい人と出会えたのは私たちの方ですよ」と言いかけたが、言葉にならなかった。やや逆説的な言い方になるが、長い水俣病史の中に、原田さんがいたことで少しは救いがあったのではないかと思う。

[6/13 熊日]

「弱者の視点」「現場に学ぶ」といったメッセージは、例えば今後発生するかもしれない原発災害による健康被害などにも生かせるはずだ。原田さんが発した言葉の数々を、あらためてかみしめたい。[6/13 西日本]

現代の豊かな暮らしが、弱者を抑圧することで成り立つ側面があることを鋭く突いた。水俣から出発し、水俣へ折り返す視点があった。[6/13 南日本]

「医者とは頭が良くなって、優しく人間っぽいのがなるといいんだけどね」。権威におもねることなく、患者に寄り添い続けた人の言葉らしい。[6/13 南日本]

「被害者側に立ちすぎる」との批判には、「医学は患者のためにある」と一蹴した…中略…「春風のような人。あの笑顔にどれだけの患者さんが癒されたか」。40年以上の交流がある作家の石牟礼道子さん(85)が語るように、穏やかな人柄で愛された。[6/13 朝日]

生まれながらの水俣病患者として生きてきた胎児性患者を「宝子(たからご)」と呼ぶ…中略…誰より患者から信頼された理由は、この宝子たちと寄り添い続けたためだろう…中略…「私を含めて水俣病による障害があることを不幸ときめつけていなかったか。なぜ不幸か、一步踏み込んで考えなくては」。そう語った原田さんの言葉が忘れられない…中略…多くの宝子たち

に惜しまれながら原田さんは逝った。[6/13 毎日]

常に弱い者に寄り添う医者だった。…中略…仲間の研究者は涙ながらに偉業をたたえ、被害者たちは「ありがとう」と半世紀以上にわたる支援に感謝した。

[6/13 読売]

原田さんが治療、研究に没頭したのは、水俣病だけでなく、炭じん爆発事故による一酸化炭素中毒や、ダイオキシン類による油症にも及んだ。[6/13 読売]

胎児性患者の証明に始まり、不知火海沿岸の住民健康調査、海外の水銀汚染調査など、原田さんの被害者救済への功績は大きい。[6/13 読売]

亡くなる12日前。自身の重篤な病をよそに、案じていたのは被害者のことばかり…中略…「また話を聞きに来ます」。原田さんとそう言って別れた。子どもたちに水俣病を伝える絵本の話など、聞きたい話はまだまだたくさんある。振り返ると、ロッキングチェアにいつもの笑顔があった。人の心をほっとさせる、あの笑顔だった。[6/14 熊日]

原田先生は、私が以前勤務した病院に週1回来て、回診しておられました…中略…患者さんの表情をきちんと確認しては、「元気ね?」「良かごたるね」と優しく声を掛ける姿が目には焼き付いています。

[6/14 熊日(読者の声)]

「水俣病事件も今後、百年も二百年も研究されていくだろう」。そう書き残した原田さんに学ぶ人を、水俣学は各分野で生み続けるだろう。[6/14 西日本]

弱者に寄り添った笑顔の人。[6/16 西日本]

原田さんに一貫していたのは、現場や当事者と向き合い、水俣病の失敗を教訓として生かしていく姿勢だった。[6/16 朝日]

昨年度、私は熊本学園大学で「水俣学」を受講した…中略…「水俣学は弱者のためにある学問である。学生は教室という殻に閉じこもってばかりいないで、現場に出なさい」と語っていた。私はその言葉が強く心に残り、自分自身のこれからの学生生活を見直そうと思った…中略…本年度も9月から「水俣学」が始まる。ぜひ、蒲島知事、細野環境相、野田首相などに受講してもらいたい。弱者のための学問を。

[6/19 熊日(読者の声)]

〈略称〉熊日：熊本日日新聞／西日本：西日本新聞／南日本：南日本新聞／朝日：朝日新聞／毎日：毎日新聞／読売：読売新聞

## 《原田先生お別れ会》

## 原田正純先生と水俣学の創世記

水俣学研究センター長 花田昌宣

6月11日、午後10時12分、原田正純先生は、急性骨髄性白血病のためなくなられた。最後は、ご自宅で、奥様、長女、二女、先生の弟さまに、囲まれて静かに息を引き取られた。享年77歳。

4月末から熊本赤十字病院に入院、5月連休明けに、ご自身の意志で退院され、抗がん治療等いっさい行わず、減少する血小板を補う輸血だけを定期的に受けつつ、自宅療養を続けておられ、6月3日には結婚45年のお祝いを家族と行われ、その後も見舞客をニコニコと迎えておられた。

60歳直前に胃がん手術、2006年8月脳梗塞発作、2007年9月食道がん手術、一昨年より血液のがん(ホジキン型リンパ腫)との診断を受けて治療中だった。

アマリア・ロドリゲスの「暗いはしけ」をかけて、青春の思い出にひとりつつ、奥様が大事にされていた庭を眺めながら最後のときを過ごされた。水俣病、三池CO、カネミ油症など公害の被害者らにつねに寄り添う反骨の医師として生涯を閉じられた。

原田先生が「水俣学」を提唱されたのは1999年のはじめ、熊本学園大学への赴任を目前にされていた頃であった。この初発の時点で原田先生が何を考えておられたのか、そしてたどり着こうとしたのはどこであったのか。最初の記録は「水俣からの問い：水俣学への構想力を求めて」(『水俣学研究序説』藤原書店所収)と題されたシンポジウムでの報告である。そこでは、「水俣学とはいろいろな研究分野の方々がそれぞれの持ち場からお互いに影響を与えあい、生き様やそれぞれの専門分野にとってプラスになる場」と語られている。多彩な学問分野、専門家と素人、国の内外で水俣病という鏡をおきながら人々が交錯するアリーナとして水俣学が考えられていた。

原田先生が、熊本大学医学部から熊本学園大学という文系の大学に移るにあたって、それまでの多くの研究活動をあらためて振り返り、いまだになし得なかったことなどを改めて課題を整理してみたら、水俣学の創成ということになったのであろう。だから、水俣病患者の声や運動、医学を初めとする研究史の反省、カネミ油症や三池CO中毒を始め国内外の現場への関わり、さらに水俣病や公害問題に係る哲学と政治の欠如感などがなくないままになった混沌の海の中から生まれたものであったといえる。そこに「水俣学」という名称が与えられ、そこに研究者が集まり水俣学研究プロジェクトが生まれ、水俣学研究センターに結実した。

水俣学の提唱に当たっては、水俣病の被害とその歴史という事実とそこにおける学問の反省が先にあり、学的体系や方法などがあらかじめ定まっていたわけではなかった。水俣学は、その事実と付き合う原田医師とともに歩んで作り上げて行く他はなかった。

社会政策学の研究者として独り立ちしていた私自身にとっては、原田先生とともに過ごした10年余の期間は、第二の学問修業時代であった。原田先生とカナダ先住民の水俣病や韓国ウルサンの公害発生地など国内外の現場を歩き、大学内では水俣学講義という授業をつくりあげ、また世界13カ国の公害被害地から被害民や研究者を招聘して2006年に開催した環境被害国際フォーラムをはじめとする様々な研究会の開催などをとおしての修業であった。

水俣病問題に関して言えば、1995年の政治解決を経て、国や熊本県の責任が認められる2004年の最高裁判決との間の時期だった。トヨタ財団の支援を二期にわたって受け、文科省の科学研究費にも採択され、徐々にスタートを始めた。まず、和解後の公害被害現場を歩くということから始めた。瀬戸内海、富山イタイイタイ病、尼崎大気汚染、新潟水俣病などの現地を訪問し、また水俣、芦北や御所浦の患者宅を訪問した。社会科学者の現地調査というよりは、現地を訪問し、被害者団体や関係機関と会って、地元の方々と語り合う時間を作るというもので、現場に立つことでその問題を感じ取ろうというものであった。

2002年には、大学の正規の授業として水俣学講義を開講し、2003年に社会福祉学研究科に博士後期課程を設置し、環境福祉学分野と命名して水俣学の研究を進める領域をおいた。その上で、大学理事会に水俣学研究センターの設置を認めていただき、本学キャンパスと水俣現地に研究センターをおくこととなった。その決定の上に立って、文科省の大型研究支援事業オープンリサーチセンターに採択されたのが2005年4月であった。

学部1年生での水俣現地研修、3年次の水俣学講義、修士課程から博士後期課程まで水俣学の教育研究体制の整備を進め、研究施設としての水俣学研究センターにこぎ着けた。いまは学内の教員24名、客員研究員59名の大所帯になった。

講義や講演においてばかりでなく、書かれるものも文科省への申請書に至るまで原田先生の言葉は常に分かりやすかった。分かりやすく語ることの意味も教えていただいた。また、定型的な思考から解き放たれて、自由に感じ、現実を見つめ、それを語る姿も拝見した。長年の経験の蓄積の上でなお、新たなものを探ろうとする姿がそこにあった。だからこそ、世界に通用し、世界の人々からも共感を得られていたのだと思う。

原田先生は最後まで、水俣学は始まったばかりなんだよと言いつけられていた。その真価が発揮されるのは原田先生亡き後のこれからであり、おわりなき物語の始まりなのだと考えている。

## 《調査報告》

## カナダと連帯する意味

## はじめに

本稿では、2012年5月29日から6月7日、花田、井上がカナダ訪問で何をみてきたのかを報告したい。訪問の目的は3点あった。1点目は、カナダ先住民族が暮らす居留地であるグラッシーナロウズとホワイトドッグで2010年におこなった健康調査の結果を報告すること、2点目はトロントでの先住民族の水銀汚染問題に関する集会で講演すること、3点目は2009年の健康調査でピックアップした人々の聞き取りを行い彼らが何に困窮しているのかを明らかにすることであった。この目的の根底には、1975年以降、原田先生が支援し続けてきたカナダの人々に原田先生の課題は当センターの課題でもあることを伝えるということがあった。カナダからくるメッセージが、原田先生の体調を気にしつつも自分たちの支えがなくなる事に少なからず不安を抱えていることがみえたからである。そのため、訪問前に原田先生のビデオメッセージを牧口敏孝(水俣学研究センター客員研究員)とともに収録し、出会うカナダの人々にみていただいた。

## カナダ先住民族を襲った水俣病

まず、原田先生とカナダの水俣病との出会いを簡単に説明する必要があるだろう。グラッシーナロウズとホワイトドッグは、カナダ五大湖の北西、オンタリオ州に位置し、カナダ先住民族が暮らす居留地である。この居留地に住む先住民族たちは、狩猟や漁撈さらにワイルドライスなどの採集による伝統的な暮らしを維持するとともに、現金収入源としてスポーツフィッシングのガイドで生計を立てていた。居留地を流れる水系をイングリッシュ・ワビゲーン水系といい、約200km上流にあるドライデン市にリード社のパルプ工場があった。この工場から排出された水銀によって水俣病がおこった。水系の汚染は州政府によって1969年に明らかとなっていたが、水俣病が確認されたのは原田先生が現地調査を行った1975年のことである。熊本



グラッシーナロウズでの報告会 2012年6月1日

学園大学では原田先生の呼びかけで2004年8月と2010年3月にカナダ水俣病調査団を組織し2つの居

水俣学研究センター研究助手 井上 ゆかり

留地で健康調査を行ってきた。結果は『水俣学研究』第3号に掲載している。

## 調査報告会での反応

この調査結果を2つの居留地で報告する予定であったが、3つの居留地が1つにまとめられて強制移転させられたホワイトドッグでは酋長選挙のただ中であつたためグラッシーナロウズでのみ報告会を行った。まず、日本での水俣病がどのような状況下にあるか、未だ終わることのない現状を説明したうえで、これまでの調査結果をふまえて、カナダで水俣、新潟に続く第三の水俣病が起きていることを認識すべきだと花田があらためて報告した。すると会場から次々に日本の現状を問う質問がでた。カナダの認定基準を策定する過程の文書群のなかに日本の環境省サイドの医学文献が引用され、カナダ政府は日本の環境省に水銀中毒に関して照会している。そのため日本の状況がカナダの人々にそのまま反映されていく構図を知っているため会場から日本の現状を問う質問が多く出たのであろう。個々人の調査結果は希望があった人に説明した。また、前回個々の抱える健康不安まで聞き取ることができなかったため希望者に話を聞かせていただいた。ケノラ市街地にある病院に車で3時間かけて行っても、カナダの医師たちは「水俣病ではない」というだけで自分の症状は何なのかは教えてくれず不安だけが残る、自分の症状は何が原因かと聞く人がいた。原田先生がカナダへ行き続けられた理由のひとつとして現地医師の水俣病に対する無理解、補償を受けていても水俣病とは認定されないカナダ水俣病認定制度のロジックが被害者の不安を増大させている現実があったからであろう。

## 連帯することの意味

原田先生はカナダの先住民族にむけたビデオメッセージで「連帯の挨拶とします」と言われた。水俣病は、汚染された魚の食物連鎖を通じて起きた有機水銀中毒という身体的な病だけを指してはいない。カナダでは先住民族の居留地に水俣病が起きた。水銀の流された水系の下流に住んでいたのは彼らだけであり、その存在が白人には見えていなかったからである。カナダでも日本においても同様に、その国の社会全体にはらむ差別や人権の根強い問題がある。であるからこそ、もはや水俣病の課題は、日本と海を越えたカナダが連帯して取り組まねばならない課題なのだと肝に銘じて、帰国した。

原田正純先生が、2012年6月11日午後10時12分、急性骨髄性白血病のためご自宅で逝去されました。享年77歳。原田先生は、最後までお元気で、なくなる数日前まで、お見舞客に語りかけ、また取材を受けておられました。6月14日、生前のご希望で葬儀とはせず、お別れ会を熊本市内玉泉院月出会館にて行い、全国から1,300名余の方が参列され、弔電やメッセージも600通あまり届きました。

「人類の負の遺産としての公害、水俣病を将来に活かす」が水俣学の出発点でした。

原田先生は、水俣学はまだ始まったばかり、水俣病事件は足尾のように100年後もまだ引き継がれて行くだろうと、最後まで語っておられました。

原田先生とともに水俣学を構築しようとしてきたもの、そして原田先生とともに歩んできた多くの人々とともに、先生のご冥福をお祈りいたします。

## 水俣学研究センター日録

### 3月

- 1日 溝口訴訟環境省交渉・報告集会参加：花田・丸山・井上・田尻（東京）
- 2日 MTPワークショップ：花田・宮北・丸山・中地・井上（タイ）
- 6日 法政大学小林教授現地センター訪問／地域情報ネットワーク聞き取り調査：宮北・守弘（水俣）
- 9日 人権研究水俣研修：現地センター
- 10日 学内教職員水俣現地研修
- 12日 水俣・芦北地域戦略プラットフォーム第26回課題検討会：宮北・藤本・守弘（水俣）
- 21日 第20回チッソ労働運動史研究会：花田・井上（水俣）／御所浦調査：田尻
- 27日 水俣病の今後を考える会議：花田・井上・田尻（水俣）
- 28日 関西の社会的事業所制度調査：花田（大阪）
- 31日 胎児性世代の被害に関するWG：花田・井上（大学）

### 4月

- 3日 水俣病問題の今後を考える会議：花田・宮北・田尻（水俣）
- 11日 女島事前調査：井上
- 14日 水俣病認定制度を問う集い：花田（水俣）
- 16・17日 ZWRT：宮北・藤本（水俣）
- 17? 20日 女島事前調査：井上（女島）
- 21? 22日 社会的事業所制度研究会：花田（大阪）
- 28日 第21回チッソ労働運動史研究会：花田（水俣）  
女島調査：下地・井上・田尻
- 29～30日 胎児性世代の被害に関するWG（水俣）
- 30日 水俣病の今を問い、今後の課題を考える集い（水俣）

### 5月

- 1日 乙女塚慰霊式
- 2日 女島調査：下地・井上・田尻
- 10日 女島調査：井上
- 11日 湯浦調査：花田・田尻
- 12日 2012年度水俣学研究センター総会
- 13? 16日 MTP調査：宮北（タイ）
- 16日 紀伊国屋書店水俣現地案内：井上（水俣）
- 17日 女島調査：井上
- 21日 群馬大インターネット中継シンポ：丸山
- 23日 女島調査：下地・井上
- 24日 天草環境会議打合せ：花田・宮北・田尻  
カナダ調査原田ビデオレター撮影：井上・牧口
- 27日 胎児性世代の被害に関するWG：花田・井上・田尻（大学）
- 29日～6月7日 カナダ調査と現地報告会：花田・井上
- 29日 佐賀大学公開講座受入れ：宮北・田中（水俣）

### 6月

- 8日 湯浦調査：田尻
- 11日 原田正純逝去 22時12分
- 14日 原田正純先生お別れ会（熊本）
- 19日 MTP会議（大学）
- 23? 24日 福祉環境学入門水俣現地研修
- 27? 28日 女島調査：井上
- 30日 福祉環境学フォーラム（大学）
- 毎月第2, 4火曜健康・医療・福祉相談

## 編集後記

原田先生に出会えたことに感謝している。自身で文字中毒と言われるくらいにいつも何か書いておられた。そして、現場から離れることはなかった。現場を見ずして何もできない。教訓は、現場にある。

(M・T)

## 水俣学通信

第29号 2012.8.1

編集／熊本学園大学水俣学研究センター 発行人／花田 昌宣  
連絡先／〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1 熊本学園大学水俣学研究センター  
Tel : 096-364-8913(ダイヤルイン) Fax : 096-364-5320  
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/ E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp

印刷／ホープ印刷株式会社